

松蔭 校長室だより

2018年 10月 1日 発行

—校長から保護者の皆さまへのメッセージです—

松蔭中学校・高等学校

校長 浅井宣光

わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠の命への水がわき出ます。 (ヨハネによる福音書 4:14)

「どらっぱ わら」

6月の梅雨に対して、秋の長雨を秋霖（しゅうりん）という言葉で表します。雨がしとしとと降り続く、寂しげな印象を受けます。台風とゲリラ豪雨を加え、各地の河川では水位が高くなっているようです。「ジョン万次郎漂流記」（井伏鱒二作）の主人公中浜万次郎は、幕末から英語通訳として活躍しました。彼は、米国人が話す英語を聞き、耳にした音をそのまま日本語で書き留めたそうです。“What time is it now?”は「ほったいもいじるな」で、水（water）は「わら」とのこと。松蔭図書館発行の「はと時計」先月号の特集「水」を読み、ふとこのエピソードの話を思い浮かべました。ということで、意味不明の「どらっぱ わら」は“a drop of water”、一滴（ひとしずく）の水なのでした。

作家の五木寛之さんが、半生を語る連載コラムを先月から新聞で読んでいます。ふと本棚に20年前のベストセラー『大河の一滴』を見つけ、読み返してみました。この本は衝撃的な書き出しで始まります。「私はこれまでに二度、自殺を考えたことがある。最初は中学二年のときで、二度目は作家としてはたらきはじめてあとのことだった。」一瞬のたじろぎと共に、過去形の語り口に少しだけ安堵するのは私だけではないと思います。「人は大河の一滴」として生まれ、小さな流れとなり、やがて大河に入り、悠久の「大きな水の流れ」のなかに包み込まれると五木さんは言います。さらに「人生は苦しみと絶望の連続」という言葉をも投げかけます。生老病死（しょうろうびょうし）の苦しみからの救いを求め続けた仏教の創始者釈迦や、その苦しみの中に生きることが人間であるとした、鎌倉時代の僧侶親鸞（しんらん）の教えに拠り、その大きな流れの中であるがままの自分を受け容れることを説きます。人の移ろいや社会の浮き沈みを川の流れに見立て、読み取ろうとすることは、文学にしる演歌にしる、枚挙にいとまがありません。運命に翻弄（ほんろう）される人間のあり方の比喩表現として、一滴の水ほど適しているものはないかも知れません。

人はある年齢に達すると、自らの生き方を見つめ直し、生きることの意味を問い直す作業に取りかかる気持ちが強くなると言います。大河の流れの中に、ちっぽけな自分の存在を発見できた時、あるがままの自分を受け容れようとする新たな人生観は、非常に新鮮に感じられるのではないでしょう。

山河を海に囲まれ、豊かな水が満ちあふれる日本とは違って、キリストが生きた聖書の舞台は乾燥地帯です。水というとオアシスに湧き出る泉や井戸の水であり、水の情景は全く異なりますが、随所で語られる水は重要な意味を持っています。水は神の恵みの象徴であり、人の心と身体の渇き

を潤（うるお）す命の水です。冒頭の聖句にある「永遠の命への水」として湧き出た一滴の水は、祝福され、この世に生まれた人間の存在を象徴しているように感じます。「大河の一滴」として、その生きる道すがらに唯々苦しさがかりが積み重なるとしても、神様が自分を受け容れ、愛してくださっていると考えることで、生きる勇気を持つことができるように思います。松蔭に集う朗らかな少女たちの声は、今日も校舎内に響きわたっています。屈託のない彼女たちも、いつの日か自らの人生を振り返り、「どらっぱ わら」としての来し方を静かに見つめる時間を持つのだろうと想像しています。

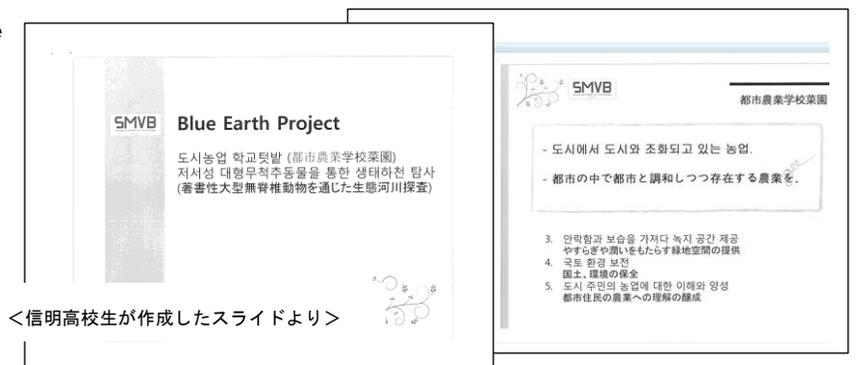
「海国」日本から世界へ 水の視点で今年のBlue Earth Project

「万物の根源は水」と述べたのは古代ギリシャ哲学者タレスです。人体の60%から70%、地球の表面積の70%は水から成るといいますが、一滴の水が、まさに「命への水」と言うまでもありません。8月に山口県で2歳の男の子が行方不明になり3日後に無事発見されました。報道によれば、沢の水を口にしながら過ごしていたそうで、男の子にとって「命への水」となりました。生物の生命や活動を維持するための良質の水、ライフラインの1つとしての水道、産業活動に欠かせない大量の水など、文明とそれを育んできた自然界の中に生きる私たちにとって必須の物質です。空気と同様にその良質な水環境を、常に保持し続けようとする信念を持ち、環境に対して働きかけなければならない時を迎えています。一滴一滴の雨水が寄り合って川の流れとなって海に入る。そしてこの海は世界につながっている。この視点を持つ時、良質の「一滴」を維持し続けるために何ができるのかを考えなければなりません。

松蔭高校のBlue Earth Projectは、様々な環境問題を取り上げて活動してきましたが、水の視点からは、海洋環境や水質保全の問題もその切り口としています。一昨年以來、サンゴ礁など海洋環境や生物多様性の保全をテーマとし、今年度はすでに高1、高2生徒が「STOP 温暖化～COOL CHOICE—海にいいこと、はじめよう—」を合言葉に活動を開始しています。8月末、神戸三宮センター街アーケード内で啓発イベントを開催したほか、10月21日には、高1生18名が横浜赤レンガ倉庫前で環境省、国土交通省など主催の「東京湾大感謝祭」にブース出展します。神奈川県的女子高生とも交流しながら活動する予定です。

日本は「島国」と言われますが、「海国」だと言い切ったのが、江戸時代の思想家林子平（はやししへい）です。当時は幕府によるいわゆる「鎖国政策」がとられていましたが、彼は「およそ日本橋（江戸）よりして欧羅巴（ヨーロッパ）に至る、その間、一水路のみ」（『海国兵談』）と述べ、日本の河川は、全世界に水によってつながっている、と訴えました。海防を充実させよ、というのが彼の主張ですが、現代風に言うと水の視点に立ったグローバル感覚と言えます。

今年、水に関するBlue Earth Projectの活動が世界に広がる1年になりそうです。韓国大邱（テグ）市にある姉妹校信明（シンミョン）高校生が、



今年1月に来校した際に、松蔭の高3生が韓国語で活動内容をプレゼンしました。すると、帰国した信明高校生が早速、韓国 Blue Earth Project を立ち上げて活動を始めました。今年の夏休みに松蔭生が韓国を訪問すると、それまでの活動の成果として韓国都市部での学校菜園の取り組みや、河川の生態系再生の試みについて説明してくれました。

さらに、モナコでの活動準備も始めています。ヨーロッパの地中海沿岸の保養地、コードダジュールに映画祭で有名なカンヌの町があります。そこから西へ30kmほどイタリア国境に向かうと、モナコ公国に入りますが、入国審査はなく、パスポートに入国スタンプを押されることもありません。国連加盟国では世界最小の人口3万人余りの都市国家で、公用語はフランス語です。この国に長年暮らしておられる Mayu Wittouck さんは松蔭高校49回生(H49)。現在、チャリティー団体を運営しておられます。彼女は Blue Earth Project を知り、後輩の松蔭生がチャリティー活動や国際的な視点を学べる機会を提供しようと、全面的にサポートしていただくことになりました。

彼女から「松蔭の自由な校風に学生生活をのびのびと過ごした。松蔭生活は今でも大切な思い出になっている。後輩がモナコに来て、どのようなことを学んでくれるのか、今からワクワクしています」とメッセージをいただきました。来年3月、高1の活動メンバーから選抜される数名が、現地を訪問し活動する予定です。モナコの女子高生とも交流することになっています。

高校3年生については、年明けの3学期、推薦入試などで2学期末までに進路が確定した生徒が中心となって取り組みます。ストローやペットボトル、レジ袋、カップなど、身近にあふれる廃棄プラスチックが引き起こす、海洋生物多様性や地球温暖化への影響について考えることにしています。廃棄プラスチックの削減に向けた活動テーマは、”Reduce Global Plastic Pollution”（海洋プラスチック汚染を減らそう）というようなものにする予定です。女子高生ならではの、女子高生にしかできないアクションを企画し、啓発イベントや協力店舗を通じた発信をしたいと考えています。

環境問題、水の問題は、グローバルな視点からの取り組みが必須です。米国のコーヒーチェーン店スターバックスは、使い捨てプラスチックストローの使用を、今後数年計画で世界中の約26,000の店舗で全廃することを発表しました。毎年20億本の使い捨てストローが、海洋のプラスチック汚染の原因の1つとなっているという観点からの決断でした。「海国」日本の松蔭からも力強いメッセージを発信し、「女子高生が社会を変える」のモットーが「世界を変える」となることを期待しています。

第2回「保護者おしゃべり会」

前回は6月11日に開催し、中1から高3まで13名の保護者の皆様にご参加くださいました。今年度2回めの「保護者おしゃべり会」を下記のように予定しています。

10月22日(月) 14:30～(1時間～1時間半程度)

場所：体育館小会議室

＊今年の年間テーマ「日常がちょっと楽しくなるカウンセリングの考え方」

後日、ご案内状を配布いたします。ふるってご参加ください。

学期末および年度末行事の一部変更等について

今年度は、6月以降の地震、集中豪雨、台風によりこれまで計7日間は臨時休校となりました。本来ならば全ての授業日数の補いをするべきところですが、2学期末、学年末の行事を下記のように変更し、3日間の授業日を補うことにしました。学期始めに配布しました「2学期行事予定表」、「2018年度ハンドブック」の行事予定が一部変更となります。特に年度末については、春休みの旅行等を計画中、という保護者の皆様もおられることかと思えます。授業日の補いの措置につきまして、ご理解いただきますようお願いいたします。

「2018年度ハンドブック」14ページ『主な行事予定』の一部変更。					
変更前			変更後		
2学期	12月4日～7日	期末考査	→	12月5日～8日	期末考査
3学期	3月2日～6日	学年末考査	→	3月5日～8日	学年末考査
	3月8日	球技大会	→	3月18日	球技大会
	3月20日	終業式・中学卒業式	→	3月22日	終業式・中学卒業式

3学期の行事に関連して、昨年度末の校長室だよりでもお伝えしていましたが、本校の中学3年生を対象とした、英数国3科の「基礎学力判定試験」を実施します。松蔭は中高一貫校ですが、教育内容を十分に理解いただくことを条件に、他の中学校からの高校入学生も受け入れています。入学試験は、専願・推薦制度によりますが、各中学校長より推薦されて出願した受験生は、私立高校入試当日、英数国各100点満点の「基礎学力判定試験」を受験します。この試験問題を、本校中3生も受験するというものです。2月9日の県内私立高等学校入試日に実施します。中学段階の学力の総まとめを行い、各自の学習課題を明らかにすることがねらいです。他学年は自宅学習日となります。